

課題図書	日本資本主義の精神	著者	山本七平
------	-----------	----	------

前半45分

著者紹介: 山本 七平(やまもと しちへい)、1921年12月18日 - 1991年12月10日)は、山本書店店主。 by ウキペディア
 評論家として、主に戦後の保守系マスメディアで活動した。日本社会・日本文化・日本人の行動様式を「空気」「実体語・空体語」といった概念を用いて分析した。その独自の業績を総称して「山本学」と呼ばれる。代表作に「現人神の創作者たち」「洪思翊中將の処刑」「空気」の研究」、それから「日本人とユダヤ人」などがある。

書籍紹介: 昭和54年10月20日に、初版の原稿はできあがったようである。以来、複数の出版社から刊行されている。日本の企業が「機能集団＝共同体」という強固な結束のもとに成り立つ世界でも類を見ない組織であることが、日本経済の強みであった点を説く。さらにその根幹には、江戸時代に培われたピューリタン思想にも似た日本独特の資本思想があったとする。いずれも刺激的な議論である。明治維新あるいは戦後の日本経済の復興・成長を欧米の資本主義の猿真似と卑下する必要がないことを教えてくれる。 by アマゾン 書評

書籍構成: 第一章 日本の伝統と日本資本主義 ※「→」以降は、レジメ担当者が選んだポイント
 1 日本のこれまでを支えたものは何だったのか → 仕事は経済的行為ではなく精神的行為
 →日本の会社は、機能集団と共同体の二重構造
 2 血縁社会と地縁社会 → 「団地の名誉」がなくて「会社の名誉」がある理由
 3 「契約」の社会と、「話し合い」の社会 →法律違反ではなく、共同体の道徳律違反
 第二章 昭和享保と江戸享保
 1 日本をつくった二人の思想家 ※いずれも土農工商の江戸時代の人物
 2 禅とエコノミック・アニマル
 → 鈴木正三 禅思想 「剣禅一如」「農業即仏行なり」「正直の旨を守りて商いせん」
 → 石田梅岩 「結果としての利潤」『儉約齊家論(道のためには儉約が第一)』
 3 神学と心学 →「池の鯉」が非難され、清貧が評価される理由＝「私的に浪費しないが立派」
 第三章 現代企業のなかの「藩」
 1 「資本の論理」と「武士の論理」 → 上杉鷹山 企業内失業者を優秀な労働力に変える
 2 日本資本主義の美点と欠点
 3 日本資本主義の伝統を失わないために
 →「忙しく振る舞う剰余人間」をどう評価するか →「働く(ハタラク)と動く(ウゴク)」 = カンバン方式

レジメ担当者の感想

我々が仕事をする理由、儲ける理由→各人毎に理由はあるだろうが、山本七平は、その答えに禅の思想を置いた。禅の思想は知らなくても、21世紀の日本人に無意識に影響を与えているのではないか？
 今自分が仕事する理由のその背景根底にあるものは何かを考えることに、日本資本主義の精神を読む意義があるのではないだろうか。

昭和54年に執筆された書物なので、いまとなれば、その後の研究や論議も進んだらうから、やや「まあ、そうだ」と当然のように受け止められる部分も多いが、おそらく、当時は、かなり衝撃的な問題提起だったと思われる。

個人的には、昭和54年においてすでに、「正規社員種族」と「臨時雇い種族」があり、それぞれ同じ職場にいても、同じ共同体には属していないので、「臨時雇い」の「契約止め」を通して、「雇用調整」するのが当たり前という論評の下りが(p. 59)が、21世紀の現在にも通じる現象であり、面白かった。

後半45分

- 1) 会員からの感想や見解についての意見交換
 - ・ レジメ発表者との解釈や見解が異なった点
 - ・ レジメ担当者の解釈や見解に、大きく共鳴できた点
 - ・ レジメ担当者の解釈や見解に拘らず、課題図書の中で重要に感じた点
- 2) 課題図書から教訓とすべき点は何か？
- 3) 課題図書から得た知識や見解を、日々の経営や、自身の生活にどのように活かしていくか？